～IS～雨弓と雷光

カトウハジメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～ＩＳ～雨弓と雷光

【Ｎコード】

Ｎ０５４６ＢＡ

【作者名】

カトウハジメ

【あらすじ】

女しか使えないはずのＩＳを使える主人公（男の娘）は、親を殺したＩＳ委員会に復讐するためにＩＳ学園に潜入する。その筈が主人公（唐変木）はハーレムをつくってしまう。

注　作者の処女作ですので何か不満があったら教えて下さると嬉しいです。

ハジマリ

僕が家に帰ると、家の中に数人の見慣れない男がいた。何か両親ともめていたが、どうせいつものやつだろう。僕の親はＩＳの開発をしている。しかし国の研究所に勤めているわけではなく、技術を売っている。今はドイツのＩＳ開発をしている。四年前まではフランスにいた。

「コアの解析が出来たならこっちによこせ！」
「そんな噂、本当な訳が無いじゃないか！」
「お前らが渡さないなら力づくでも渡してもらうぞ！」

早く行かなきゃ！父さんと母さんが危ない！

パンパンッ

僕が家に入ったときにはもう遅かった。

父さんと母さんは頭から血を流していた……

「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

父さんと母さんが……
次の瞬間、僕はＩＳを纏っていた。二機のＩＳを……
気づかないうちに僕は全身の刃を奴らに向かって飛ばしていた。奴

らの半分ぐらいは倒しただろうか。　次に僕は全身の銃を奴らに対して放っていた。威力が強すぎたのか家ごと吹きとんだ。

僕は気が付いたらＩＳを解除していた。この後直ぐに警察が駆けつけた。僕の両親と奴らは全員死んでいた。僕は警察の人に、家が崩れているのを見て固まってしまったのだろうと言われた。奴らはＩＳ委員会の人らしい。僕は両親の友達のＩＳ開発の人に預けられる事になった。

各種設定

主人公
小鳥遊（たかなし）　空（そら）

一人称　僕　髪は黒で肩にとどくかとどかないかギリギリくらい
男の娘、親の仕事がＩＳ開発の関係でヨーロッパにいる事が多いのでかなりの数の言語が話せる。唐変木。６歳までは日本、１０歳までフランス、１４歳までをドイツですごす。フランスでは家が近く、学校が一緒だったからシャルと幼馴染。ドイツでは両親の仕事の関係で軍に行く事が多く、ラウラと友達。専用機は雨弓（あまゆみ）と雷光（らいこう）

雨弓

機体カラー　虹　第三世代
完全にＶ字まで開く銃を全身に４７個装備したＩＳ。銃のＶの間から虹色の粒子でできた菱形の板のような物がでている。その粒子で完全なステルスを実現した。このステルスが第三世代兵器。この銃以外武装も装甲も何もついていない不良品。しかし、銃の間から出す板を刃として扱う事ができるし、その板を装甲として扱う事ができるためいらない。銃をビットとして扱う事ができる。

雷光

機体カラー銀　第三世代
真ん中で縦に半分に分かれ、銃口が出てくる剣を全身に４７個装備した機体。此方は薄いエネルギーシールドのようなものでコーティ

ングした剣により、相手の攻撃を完全に受け止める事ができる。この剣が第三世代兵器。この剣以外は何も装備していない。この剣はビットとして扱う事ができる。

美香と美希

「次の駅で乗り換えか」

僕は両親の友達のＩＳ研究者のところに向かっている。その友達は海辺の田舎町に住んでいるらしく、電車で一時間半、バスで三十分乗り継いだ所にある。

数十分後

「ここか」

ピンポーン

僕はチャイムを鳴らした。

「は～い」

中から若いお姉さんがでてきた。

「今日からお世話になる小鳥遊　空です」
「ああ、君が空くんか、本当に君男なの？」
「何言ってるんですか。男に決まってるじゃあないですか」
「まあ、話はリビングでするとして、さあ上がって」
「お邪魔します」
「お邪魔しますじゃあないよ、ただいまだよ」
「ただいま」

リビングにて……

リビングには二人の女の子がいた。片方は背が高く、いかにもお姉さんって感じの子で、もう片方は背が低く、お姉さんみたいな女の子の後ろに隠れているいかにも小動物みたいな少女だ。

「うぅ、お姉ちゃん。やっぱり無理だよぅ」

「ほら美希、困ってるじゃない」

あ、小動物みたいな方が逃げた。すぐに捕まった。捕まるの早いな。

「うぅ」

妹が涙目になってる。可愛いな。そんな事をしていると、若いお姉さんがお茶を持って戻ってきた。

「自己紹介してなかったわね。私は神崎美緒。ＩＳをつくってるよ」

さっきの若いお姉さんだ。

「私は美香よ。」

いかにもお姉さんみたいな方だ。

「うぅ、わ、私はみ、美希です。」

小動物みたいな子。

「僕は小鳥遊　空です。今日からお願いします。」

「か」
「か？」
「可愛いいいぃ」

え？ちょっあっ駄目そこはあっあぁ
美香さんが僕に抱きついてきた。

「美香さんやめて下さい」
「ああ、美香さんっていうのやめてくれない？呼ぶならお姉ちゃんって呼んで」
「お姉ちゃん」
「やっぱり可愛いわ」
「同い年なんだけどね……」
「え？同い年なんですか？」
「そうだよ、美香ちゃんも空くんも、あそこにいる美希ちゃんも同い年だよ」
「え？何で同い年なんですか？」
「そんな事は神様に聞いてよ。」
「あの、お姉ちゃんと美希ちゃんは何で同い年なんですか？」
「ああ、それ？それはあの二人は拾ってきた子なんだよ」
「あとは何で同い年なのに僕と美希ちゃんはお姉ちゃんの事をお姉ちゃんって呼ぶんですか？」
「ああそれは多分誕生日が美香ちゃんの方が先だからじゃない？」
「私の誕生日四月二日なのよ」

ああそういう事か

「ん？何これ？」

美緒さんが僕のケータイに着いたお守りを……

「両親が生きているときに僕に渡したお守りです」
「へぇ、ちょっと見してね」
そう言って美緒さんは僕のお守りを取ってお守りの口を……
「って何やってるんですか！」
「お守りの口を開けてるんだよ」
「やめて下さい！」
「この中からＩＳの匂いがしたんだよ」
「ＩＳ？」
「もしかして君の両親は自分達が死んでしまう事をあらかじめわかっていたんじゃないかな？」
え？僕の両親はあらかじめわかっていた？自分達が死ぬ事を？そうかもしれない。お守りの中にＩＳが入っていたのも自分が死んだときに美緒さんにＩＳが渡るようにしたのかもしれない。
「あれ？このＩＳ一回起動させられたみたい」
「え？それってどういう……」
「いや～このＩＳ、使いやすいように一回起動するとお札の中に入っていたのが、待機形態になるように出来てる」
「それが待機形態になっているって事ですか」
指輪が出てきた。
「これ、二機のＩＳだよ！」
え？確かに二重になってる。

「後で検査してもいい？」
「両親が美緒さんに渡したかったんだからいいですよ」
「いや、ＩＳじゃあなくて君を」
「え？まあいいですけど」

次の日

「検査の結果が出たよ。ＩＳ適性はＡだったよ」
「何で僕男なのにＩＳ適性があるんですか？」
「わからないよ、これからどうする？こんな事誰かにばれたら即実験動物だよ？」
「それは嫌です」
「そういえば両親を殺したＩＳ委員会の奴ら憎くないの？」
「正直、憎いです」
「じゃあＩＳ学園に入ったら？ＩＳ委員会に近づくよ」

そうだ、僕は今中学三年生、来年は高校だ。

「って入る時点で僕、実験動物じゃあないですか！」
「そこはほら、女装するとかしてさあ」

こうして僕はＩＳ学園に入学する事になった。

ＩＳ学園（前書き）

ＩＳ学園に入学です！

ＩＳ学園

　僕は今ＩＳ学園にいる。女装して入学するのはかなりスムーズに進んだ。雨弓のステルスは粒子で周りの風景に溶け込むのだが、それを応用して、体つきを女の子っぽくしたのだ。僕の身体が女の子っぽいからできるんだって美緒さんは言っていた。それはあまり嬉しくなかった。ちなみに今僕は雨弓しか持っていない。雨弓の調整をしていたら時間が足りなかったらしい。

「小鳥遊　空です。よろしくお願いします」
「可愛いぃぃぃ」
「ぎゅ～ってしたい！」
「やっぱり可愛いなぁ、空は」

最後のお姉ちゃんだよねぇ？
織斑くんはかなり引いています。ちなみに神崎姉妹は二人とも一組だ。そこらへんは美緒さんが織斑先生に頼んだらしい。美緒さんは織斑先生と友達だったらしい。

三時間目の前の休み時間

　織斑くんがセシリアさんに絡まれてる。

「極東の島国というのは、こんなにも未開の地なんですの？」

ピキッ

何かがきれる音が聞こえた。

「イギリスだってたいし「あれ？世界一料理がマズイ国って何処でしたっけ？」
「うぅ」

つい言ってしまった。

キーンコーンカーンコーン♪

三時間目

「よし、来月のクラス対抗戦に出るクラス代表を決める。立候補、推薦、何でも構わん！誰かいるか？」

「私は織斑くんを推薦します！」
「私は小鳥遊さんがいいと思います！」

僕を推薦したのは絶対にお姉ちゃんだよね？織斑くんは面倒臭そうな顔をしているし。

「他にはいないか？いないならこの二人の中から決める」
「ちょっと待って下さい！納得がいきませんわ！大体実力で言えばわたくしなのに、それを珍しいからという理由で未開地の猿などにやらせないで下さい！」
「いい加減にしようよ、その日本を馬鹿にするの」

またやってしまった。

「だったら分かりやすくＩＳで勝負しようよ」

うん、これならいいね！

「俺はどれくらいハンデをつければいいんだ？」

ドンッ

誰かが机を叩き、立ち上がったみたいだ。

「たかがＩＳを使えるだけで調子に乗らないで下さい！だから男は嫌いなんです！私も立候補します！」

「とりあえず座れ、グアリーノ」

あれはイタリアの代表候補生のアレッシア・グアリーノさんだな。

「じゃあハンデはいい」

織斑くん、それが普通だよ？

「じゃあ一週間後に織斑と小鳥遊、オルコットにグアリーノは第三アリーナでＩＳでクラス代表を決める」

どうしようかなぁ、オルコットさんのティアーズ型も、グアリーノさんのテンペスタＩＩ型も射撃型だったから対策考えておかないと。

放課後

「私たちとは部屋別になっちゃったね、空お姉ちゃん」

「そうなの？」

「私とお姉ちゃんは一緒の部屋だよ」

「へぇ」

「じゃあまたね」

最初は僕に怯えてたけど今はかなり美希ちゃんは僕に心を開いてくれている。それは何だか嬉しいなって。某魔法少女アニメのセリフを思い出してしまった。

そう言えば僕の部屋はどうなんだろう。女装してるから女の子と同室なのかな？

自室前

「ここが僕の部屋か」

鍵を使って中に入る、本当はもう少し前から寮に荷物を持ってくるらしいんだけど、僕は雨弓の調整がギリギリまであったから時間がかかってしまった。荷物はステルスで見えなくしてあまり迷惑にならないようなところに置いてある

「誰かいますか？」

返事が無い、誰もいないようだ。入ったら荷物が置いてあった。やっぱり女の子と一緒の部屋みたいだ。聞く所によると、隣は織斑くんの部屋らしい、彼には正体を教えようと思っているので言ってみよう。

「誰かいますか？」
「はい」
「ああ織斑くん、話があるので上がってもいい？」
「いいぜ、篠ノ之さん、小鳥遊さんを上がらせてもいいか？」
「勝手にしろ！」

以外と簡単に上がれた。

「で、話って何だ？」
「ちょっと待ってね」

そう言って僕は雨弓の粒子をとく。
胸が徐々に無くなり、体つきも徐々に男らしく……はあまり変わらなかったが喉仏がでてきた。髪も背中の真ん中あたりまであったのが肩まであるかないかまで短くなった。

「まさかお前男なのか？」
「うん、まあ男どうし仲良くしようね」
「でも、あまり変わらないな」

ピキッ

「織斑くん、何が変わらないって？」
「あの、その、ほら雰囲気とか！」
「そこに座りなさい！」

それから僕は織斑くんに説教を三十分ぐらいして、僕の事を空って呼ぶことと、僕は織斑くんのことを一夏って呼ぶことを伝え、部屋を後にした。

部屋に戻るとそこにいたのは、
男嫌いのアレッシア・グアリーノさんだった。

アレッシア・グアリーノ

僕が一夏の部屋から帰ると、アレッシア・グアリーノさんがいた。

「えっと、グアリーノさんだよね。よろしく」
「よろしくね！小鳥遊さん！」
「ベッドどっち使う？」
「私はどっちでもいいよ」
「じゃあ僕は奥のベッド使うね。シャワーとかどうする？」
「私が先でもいい？」
「いいよ」

ぐうぅ～

僕のお腹鳴っちゃったよ……聞かれて無いといいな……まあこんな部屋に二人だけだし聞かれてるよね……

「くすっ、じゃあご飯食べに行こうか」

笑われちゃったよｏｒｚ

「美味しいね♪ここの料理、グアリーノさん」
「そうだね、そんなに食べるの？」
「いや～いっぱい食べないとどんどん痩せてっちゃうから」
「何その羨ましい体質」

それにしてもここの料理すごく美味しいです。こんなにいっぱい食べないよね、女の子は、直ぐにばれちゃうなこれは。でもグアリー

ノさんは男嫌いだからばれたらどうしよう。弱みでも握ればいいのかな？

「どうしたの？小鳥遊さん？急に黙り込んじゃって」
「別に何でもないよ！うん、何でもない」
「変なの」

そのまま僕は何も喋らなかった。

自室にて

「シャワー空いたよ」
「うん、今入るよ」

この時間は嬉しい、女装しなくていいし。
　僕が出ると、グアリーノさんは電話をしていた。弱みを握れそうだったから脱衣所に隠れてしまった。イタリア語で何言ってるのかわからない。ケータイで録音して美緒さんに送ろう。
　僕は録音が終わって少したってから脱衣所を出た。
「小鳥遊さん、長かったね」
「いや、電話してたみたいだから悪いかなって思って」
「ごめんね気使わしちゃって、出てきても良かったのに」
「じゃあ今度からはそうさせてもらうね」
「うん、よろしく」

あはは、騙しちゃったよ……

「そういえば小鳥遊さんって専用機持ってるの？」
「うん、持ってるよ。これ、雨弓っていうんだ」

そう言って雨弓の待機形態の指輪を見せた。普段からＩＳを使っている僕は待機形態の指輪のままステルスを使うことができる。今は雨弓しか持っていないので半円型の石がついた白銀の指輪である。

「変な形だね。見せてくれてありがとう。寝よっか」
「うん、おやすみ」
「おやすみ」

翌日の放課後

「空くん、昨日の電話、翻訳できたよ」
「ありがとうございます」

内容はこんな感じだった。

「それで、結婚の件は」
「お前がＩＳ学園を出たらな」
「もう少したってからでは駄目ですか？」
「駄目だ。お前、誰のおかげでお前らの家族が裕福に暮らせていると思ってるんだ？俺のおかげだろ？」
「……はい」
「今度の長期休暇のときはイタリアに来いよ？たっぷり可愛がってやるよ。今度こそはヤろうな？」
「……はい」
「という事で、ＩＳ学園を出たら即結婚な。これでお前もマフィアの世界へ足を踏み入れることになるぜ」
「では切ります」

ここで電話は終わっている。状況を整理すると、グアリーノさんはＩＳ学園を出たらマフィアの人と結婚するらしい。グアリーノさん

はそれをあまり良く思っていないらしい。
　これは弱みを握ったのかな？うん。グアリーノさんには男ってばらしても大丈夫そうだ。
　そんな事を考えていると、グアリーノさんが帰ってきた。
「グアリーノさん、これ」
そう言って僕はそれを再生した。
「こんな物を私に聞かせてどういうつもり？」
「交換条件。グアリーノさんのことを言いふらさないかわりに僕の秘密を知っても黙っていてほしい」
「わかった。先に私のこと詳しく話すね」
「私は最初普通の家に生まれた。十二歳までは普通に育った」
そう、十二歳までは……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0546ba/

～IS～雨弓と雷光

2012年1月5日01時50分発行